
殺し屋ジョブスはいじめられっ子

ジョブス・マンソン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋ジョブスはいじめられっ子

【Nコード】

N1967Z

【作者名】

ジョブス・マンソン

【あらすじ】

やあ、いじめられっ子のみんな。

僕はジョブス・マンソン。

君たちと同じいじめられっ子だ。

だが、君たちとは決定的に違うことがある。

それは行動力さ。

僕はあのイカした奴らを皆殺しにするため、殺し屋になることを決意した。

だけど現実はずらいね。

訓練って名前の地獄は、ひよろひよろなガキにすぎない僕にとって、いじめられることよりも辛かった。

そんなある日、僕らの学校にテロリストが現れ、周りは騒然とする。その最中、僕は立ち上がった。

「ありえないと思うだろ？ 僕は殺し屋なんだぜ」

これは、とあるいじめられっ子の復讐日記。

殺し屋になるなんて、とっても簡単だ

今時、自分の生活に疑問を持ったバカが殺し屋になるなんて日常茶飯事だ。

隣に住んでるハリーなんか、友達の首にナイフを突き刺して、色んな物をえぐり出していたらしい。

そんな彼はポリス共に捕まりもせず、今も普通に学校に登校して、平然と他の友達と談笑している。気の違ったような狂者とは思えないほどの常人っぷりだ。

つまるところ、僕も殺し屋になろうと思っている。
なぜかって？

そんなもん、決まっているだろ？

僕はくだらない日常に飽きてきたバカだからさ。

「出てこいよ、ジョブス」

同級生の、嫌みな笑い声が、僕の隠れている個室に聞こえた。その声に毎日のようにストレスを感じていて、もし僕が臆病じゃなかったら今すぐ気違いハリーのようにヤツの首にナイフを突き立てただろう。

僕は臆病だ。

「水かけてやろうぜ」

幼稚なことばかり考える奴らに、苦笑した。

もちろん、そんな風に気取ってみせても僕にはスーパーマンみたいな力はないから、ただのええかつこしいにしかならない。

バカ共は容赦なく水を降り注いだ。

そして聞こえるバカたちの耳障りな笑い声。

これが僕の日常だ。

いや、こんなの序の口というところか。

バカな奴らの中には、ラグビー部に所属する奴なんかもいたりして、その無駄に鍛えられた、岩のような肩で吹き飛ばされて一週間に一回は青いアザが浮かんでくる。

物語なんかにもあるが、現実のラグビー部もヤな奴ばかりだ。

だから、僕は母親に言ったんだ。

今までしたこともないような真面目な顔でね。

「殺したい奴がいるんだけど」

サイッコウにカツコイいだろ？

人生でも三本の指に入ると思ったね。

だが、そんな僕の決意も虚しく、母親は困ったような顔をして、こう叱るんだ。

「そんなこと言っちゃダメでしょ？」

ってな。

こうなったら、僕自身が動くしかないだろ？

ネットとかで必死になって探したね。そりゃあもう、血眼とも言えるほど。

青くなったアザを冷やしながら、それでもマウスを握ったさ。

そして、とうとう見つけたんだ。

「殺し屋、雇います？」

面白い見出しだな、と僕はすぐさまカーソルを合わせた。
途端に大音量の軍歌が流れだしてね、イスから転げ落ちたさ。
扉の向こうから父親の怒鳴り声があるし、とりあえず音量をゼロ
にして、画面を見つめた。

シンプルだった。いや、それはもうシンプル。

名前と年齢、それだけを記入してください。

それだけが真っ白な画面に書かれているんだ。

あの軍歌はなんなんだ、と怒りが湧き上がってくるのも無視して、
とにかく文字を打てる場所を探した。

啞然としたね、びっくりしたね。

その書き込むところを画面の隅から隅まで探しても見つからない
んだ。

ならどこなんだ？

「名前と年齢、それだけを記入してください。1」

は？

いや、まさかそこに書き込むのか、と大笑い。

また父親の怒鳴り声があるが、そんなの腹を抱えるほど笑う僕の
耳には届きはしなかったさ。

灯台下暗しという日本語を、ようやくここで理解した。そりゃ気
づかないわけだ。

「ジョブス・マンソン。15歳」

律儀に句読点なんか付けちゃってるんだぜ、僕。

まあ見ての通り、僕は15歳だ。

中学生？ 違う違う。あんな幼稚な奴らと一緒にしないでくれ。

これでも偏差値は70の高校に通っているんだ。いわゆる、エリートって奴さ。

それでもバカで幼稚な糞野郎は必ずいる。

「おっ」

いつから出ていたのか分からないエンターボタンをクリックした。すぐに画面は移り変わり、僕の住む地域の地図が表示された。なんで知ってるんだ？ もちろん僕も疑問に思ったさ。

いや、こんな治安の悪い世の中なんだし、殺し屋とかいう組織なんだから当たり前なのかも知れない。

そう考えたのは事後だ。

今の僕は、何も考えていない豚のような思考回路でその地図通りの場所に足を運んだんだ。

さあ着いた。

どこか教えてほしいか？

公園さ。公衆トイレとかいう絶好のレ スポットで有名な、いわば穴場さ。ふふ、上手いだろ？ 穴場ってさ。

僕をいじめているバカな奴らも、ここでレ プしていた体験を自慢げに話していた。

「来たはいいが」

誰もいない。

墓地のようにシーンとした公園は、僕みたいな不幸な人間を手招きしているようにも感じたが気のせいだったよ。

人いたし。

「君がジヨブス君か」

スキンヘッドが似合う、掘りの深い顔のおじさんが歩み寄ってきた。

ここで、危険を察した僕の思考回路は豚からスーパーコンピューターへと変貌した。

ここは絶好のレプスポットであり、最高のハッテン場だ。簡単に言えば、ホモが集まるところだ。

なら、このおじさんはなんだ？

もしかしたら本当に殺し屋かも知れないし、僕の尻穴を掘ろうとしているホモ野郎かもしれない。

さて、スーパーコンピューター並みの頭脳を無駄に使ったところで、おじさんと握手をした。

そのゴツい手はとても冷たい。ずっと僕を待っていたのが肌で感じられた。

「殺し屋になりたいんだってね？」

おじさんは、その掘りの深い顔に似合わず、愛嬌のある笑顔を見た。

黙って頷く。

心の中じゃあすでに殺し屋の気分さ。目をキリッと細めて、いかにもな雰囲気を漂わせる。

僕は高校生のひよろひよろなガキに全く似合わない表情をして、おじさんにだけ聞こえるよう、小声で言った。

「あんた、本当に殺し屋か？ 殺気を感じないぜ？」

正直、これをいじめっ子連中に見られたら、自殺ものだろう。

そんな僕のくだらない茶番に、おじさんはウィンクをした。

「殺気なんか出してちゃあプロ失格だからね」

その科白と同時に、おじさんは僕の背後へと周り、僕の細っこい喉にナイフの切っ先を当てていた。

さっきまで手ぶらだったはずなのに、まるでマジシャンみたいだと緊張感もない感想を抱いた。

そんな命に関わる状況でも、僕は強く言ったね。

「プロ、か。無防備のガキに刃を当てた時点で、あんたはプロ失格だよ」

「ふっ。それもそうか」

途端に背筋から悪寒と、冷や汗がぶわっと吹き出した。

それはもう死に直面したと言っても過言じゃないね。

それは、紛れもなく殺気だったからさ。

「あ、わ……あ……」

僕は無様にへたり込んで、恐怖のあまり失禁していた。

買ってもらったばかりのジーンズが濡れていくのを、涙の出そうな顔で見つめるぐらいしか出来なかったね。

おじさんはまたいつの間にか僕の前に立っていて、手を差し伸べてくれた。

「立てるか、ジョブス君」

黙って頷くしかなかった。

そこにはもう殺気なんか微塵も無かったのに、それでも僕は恐怖

していた。

その殺気は、いじめっ子にいじめられることなんかより、もっと恐かったからさ。上辺だけ強がっていた程度の僕の精神なんか、おじさんの殺気の前じゃあトランプで作ったタワーのように脆い。そして、一押しすれば簡単に崩れてしまう。

連れられるままに連れられ、男子便所へと入っていく。

そのまま個室へと誘導され、扉を閉められた。

途端に身震いがした。

今度は殺気じゃない。

この状況じゃあ、どうぞ掘ってくださいと言ってるようなもんだ。だけど、僕の尻穴は処女のままだった。

便所の、何も無い壁が、奥にパタリと倒れたんだ。そして、そこには地下へと続く階段が伸びていた。

「この先だよ」

促され、ビクビクと震える。

濡れた股間がすごく寒いが、それでも我慢したさ。あのバカ共を殺せるなら、ってね。

イカしてるだろ？

行き止まりにあつた扉に入ると、また失禁をしそうになった。

なぜか？ それはさつきと全く同じ理由さ。

そこには、殺気が渦巻いていたんだ。

何人もの人間が殺気を放っている。個人個人は微々たる物だろうけど、それがいくつにも重なり、合わさっていた。

怯える僕に、その人間たちの視線が集まった。

「おいおい、ガキかよ」

「震えてやがるぜ」

「股間濡れてっけど、まさかしょんべん漏らしちまってんのか？」

爆笑が起こった。

それに腹が立ち、僕は叫んだのさ。勇敢にもね。無謀？ 殺すぞ。

「笑っんじゃねえ！！」

一瞬で静まり返るが、また爆笑が沸き起こる。

その時の僕は身の程を知った方が良かった。専門学校に三年通わせて、みっちり叩き込むべきだったね。

浴びせられる罵詈雑言の笑い声。

「行こうか」

ライオンの群れに挑む小鹿を哀れに思ったのか知らないが、おじさんが優しく背中を押してくれた。

ここからが本当の地獄だった。

たかがいじめっ子なんていう頭のおかしい連中のためには、あまりにも過酷だった。

殺し屋になるなんて、とっても簡単だ（後書き）

「殺し屋っていうのは、こんな現実離れた奴らばかりなのかい？」

「いや、殺気だけで失禁させられるような奴、まずいねえよ」

「そりゃそつだ」

それは相手を殺そうと思うだけでいい

おじさんは僕に新しいズボンをくれた。

ダメージジーンズと言えば響きは良いだろうが、どう見ても使い古された小汚いズボンだった。それでもお漏らしのままというのは恥ずかしいだろ？ 即座に僕は着替えた。

「君はなぜ、殺し屋になりたいんだい？」

僕がジーンズの裾に足を延ばしていると、おじさんが聞いてきた。残念なことにプライドだけは一流の僕は、口をもごもごことさせてなかなか答ええない。

しびれを切らしたおじさんは、ニヤリと笑顔を浮かべて、

「いじめられてるんだろ？」

と、的当たりなことを言ってきた。

それは真実なだけに、なにより驚いた。

僕は失態は必ず取り返すし、万一起り返せない場合は完璧に隠蔽する人間なのさ。もちろん、いじめのことは、他生徒にすら知られていない、はずだ。

間抜けな面のまま固まった僕に、おじさんは変わらぬ調子で続ける。

「君のことはいろいろ知っている。高校卒業後はハーバードに進学を希望。他にくだらない情報と言え、父親は極度のヘビースモーカーで、母親はカルト宗教に入っている」

全て当たりだった。

ただただ繰り返される僕の秘密に、当の僕は口をあんどりと開けるだけだった。

なぜこんなにも知っているのか、そんなの興味があったに決まっているだろう？

「お漏らしが治ったのが六歳の時。初恋が十一歳のー」

「なんで……知ってるんだよ……？」

「んん？」

待つてましたと言わんばかりの満面の笑顔に、僕は顔をしかめた。やっぱり、笑顔は美人なお姉さんがイイネ。

「我々は秘密結社だからね。そりゃあ、標的の情報くらいは調べてある」

「ひょう……てき……？」

「そう、標的」

標的なんて言葉を殺し屋から聞けば、まず何を考えるだろうね。僕は、真っ先にこう考えた。

「僕は、殺し屋に狙われていたのか？」

「ふふ、正解だよ」

目を丸くして、あうあうと声にならない声をあげるしか出来なかった。

だって殺し屋だぜ？ しかもプロの。そんな奴らに命を狙われていたんだ。

「じ、じゃあ、どうして僕は生きているんだ!？」

「ん？ その依頼主が死んだからさ」

「へ？」

「あら、違ったかな？ あの仕事の依頼主は君かと思ったんだが」

「なんのことだよ！！」

「ハリー君を知ってるかな？」

「あ、ああ」

もちろん知っている。

隣人で、殺しをした気違い野郎だ。

「彼が、君を殺せと言った依頼主を殺したんだ」

「なんだって！？」

ここに来てから驚くことばかりだね。

ただの人殺し野郎かと思っただ奴が実は僕の命の恩人だったなんて、そんなSF映画みたいなことがそうそう起きていいわけがないだろ。そういえば、ハリーはアイツを殺す前日に変なことを言っていたのを覚えている。

“命拾いしたね”

あれはそういう意味だったのか。

「にしても」

おかしいだろ？

「なんで僕が殺されなくちゃいけないんだ？」

それだけが疑問だった。

一端の高校生に過ぎない僕に、殺し屋を雇うほど殺意を持つこと

なんかあるのか？

ありえない。僕は他人に嫌悪感を与えないように精一杯生きてきたからさ。

困り果てた僕に、おじさんは言った。

「君には、特殊な能力があるからさ」

「僕に？ 特殊能力？」

おいおい、本当にSF映画みたいになってきたぞ。

「ああ、君はマラソンをしている時に、周りがものすごくスローモーションで見えたことはないかい？」

「あ、あるけど」

確かにあった。

クラクラするくらい疲れていた時に、まるで世界の時間が止まったような感覚に見まわれたことがある。

その時は疲れすぎたせいなのかと楽観的に考えていた。

「それが君の特殊能力。それを自在に扱えば、弾丸すらも止まってみえるようになる」

そんな馬鹿な話があるか。

「バカにしてるのか？」

「してないよ。ただ、君には殺し屋の才能がある」

「すごい極端な才能だな」

「ふふ。まあそう言わずに」

おじさんは薄ら笑うと、すぐに神妙な顔に切り替わった。

「あれはね、心拍数が400を超えた時に使うことが出来るんだ」
「そんなに行くもんなのか？」

「ああ。あまりに心臓が早く動きすぎて、脳もそれにならう。それで頭の回転が早くなりすぎて周りが遅く見えるようになるんだ」

「そんなこと、どうやって知るんだ？」

「だから、秘密結社だからね」

またおじさんは笑顔に戻った。

そういつことなら、試してみたい。

「さっそく練習させてくれないか」

「うん、いいけど。まずはその遅くなった世界に対応できるほどの忍耐力を鍛えないとね」

ジーンズのベルトやチャックを整え、二人は訓練所へと向かった。

「ぎへへ。コイツが例のガキか」

殺風景な訓練所に、小太りの男が一人だけ立っていた。

その男は長いが荒れた髭を生やしていて、ワイルドを履き違えたような格好だった。

「そつだよ。この子が、例のワールドストッパーの」

ワールドストッパー
世界を止める？

なんともカッコイい名前が出てきたな。そういう二つ名にはとても憧れる年代だけに、僕の心はとても高鳴っていた。

「んじゃ、後は任せたよ」

そう言って、おじさんは部屋の入り口に座った。目の前の男と、初めて対峙する。やっぱりコイツも微々たる殺気を放っていて、僕は縮み上がりそうなのを必死にこらえた。

「坊主、名前は？」

男のガラガラ蛇の声に、素っ気なく答える。

「……ジョブス。ジョブス・マンソンだ」

「ぎへへ。いい名前だ。俺のことは不気味な男ブギーマンって呼んでくれや」

なんてイメージ通りの名前だろう。

ブギーマン。まさにその通りだ。不気味で、陰湿で、ネチツこそうな容姿をしている。

ぎへへ、と笑って開かれた口の中は、歯がボロボロだった。

「さあ、始めようか。ぎへへ、訓練を」

「具体的に何をやるんだ？」

「大丈夫さ。ぎへへ、お前は一方的に俺に殴られ続ければいい」
「は？」

言葉を言い返す前に、ブギーマンの拳が僕の鳩尾みぞおちに入っていた。全く鍛えていない僕は、腹を押さえて転げ回る。

なにせ大人の拳だ。それを鳩尾だぜ？ 立つのも億劫になる。

「早く立てよ、坊主！」

ブギーマンは僕の髪を掴み、持ち上げる。
ぶちぶち、といくつか髪の毛が千切れ、痛みで絶叫した。

「ぎいあぐがああああああぎいいいいいいい!!」
「いいね。ぎへへ、その声が聞きたかったんだ」

涙を流しながら、おじさんに助けると目でサインを送る。
だけど、

「頑張れ、ジヨブス君」

と笑顔で言われるだけだった。

髪を掴まれたまま、顔を殴られ続ける。

何度も、何度も、何度も。

血を吐いて、歯が取れて、それでも殴られ続けた。

「ぎへへ、まあこんなもんだろ」

何時間経ったんだろうか。

僕は意識を朦朧としながら、地に倒れていた。口からは血が流れるし、もう痛みどころか感覚も無い。

ブギーマンは体中に脂汗をかいて、ぜえぜえと肩で息をしていた。

「お疲れ様」

おじさんはブギーマンにタオルを渡した。ブギーマンはそれを受け取り、拭きまくった。

次に、地べたでボロ雑巾になっている僕を、おじさんは抱き起こした。

「大丈夫かい？」

「は、……………い……………」

空気が漏れたような、微かな声しか発せられなかった。

意識が途切れかけた僕に、ブギーマンが歩み寄ってきた。

ぎへへ、とあの不気味に笑いながら、

「根性が無えなあ」

僕を馬鹿にしたのだった。

去っていくブギーマンの背中に文句の一言でも言おうとしたが、
口がまともに動かせない。

「これじゃあ、銃器の訓練は無理かな」

「や、やいます……………」

おじさんの肩を借りて立ち上がる。

「まだ、出来ます……………」

「そうかい」

入り口へと、ふらふらしながらも歩く。

その間はおじさんは手伝ってくれなかったが、それでも良かった。

そんなの、僕のプライドが許さない。

それは相手を殺そうと思っただけでいい(後書き)

「プライドだけは一人前だな」

「絶対に折れないプライドが無かったらここで終了だからな」

「そりゃそつだ」

あとは行動に移すかどうかだ

――射的場。

そう呼ぶのが何よりもしっくりと来る場所だった。

木で出来た台があり、その上に黒光りする物体が置いてある。その物体の正体は、考えるよりも先に察した。

拳銃だ。

この形状はどこかで見たことがある。

手に取り、手の中でクルクルと回す。

「おっ、やはり興味があるかい？」

「ああ、にしてもこりゃあ」

カチツ、と引き金を引いた。弾は入っていないのか、ハンマーを弾くような音しか鳴らない。

だが、それでも僕の手の中に振動が伝わってきた。

指で、その拳銃の丸い銃口を撫でまわす。

「ベレッタM92。使用弾薬9mm。装填数は15の92シリーズか。やはり自動拳銃オートマチック」

すらすらと、本を読み上げるように話すと、おじさんが

「物知りだねえ」

と褒めてくれた。

小さな頃から拳銃に興味があり、それでバイオハザードなんかも出てくる武器は一通り覚えてしまっている。このベレッタM92もその一つだ。

新品のように光る拳銃を台に置いた。

「で、的はどこなんだ？ 見当たらないが」

僕が言った通り、この部屋には的が無い。発砲台はあれど、的はどこを見渡しても無いのだ。

しかし、それよりも目を引く物があった。

「血……？」

乾ききってよく分からないが、茶色い染みが壁や床に、まるで液体が飛び散るように付着していた。経験測でしかないが、あれは長く放置された乾いた血のようにしか見えない。

それに気づくと、この部屋を漂う臭いにも意識が向く。生臭い臭いだ。

一気に気分が悪くなり、膝をついた。かろうじて台に手を置いて、また立ち上がる。

手で鼻を覆うが、異臭は鼻について離れない。

まさかとは思つが、

「……！？」

カーテンが閉まるような、ガラッ、という音と共に、何かが天井から落ちてきた。それは紐で繋がれていて、着地する前にブラブラと宙に揺れる。

吐き気を催すのは、それからすぐだった。

僕はその落ちてきた物に目をそむける。

だって、あれは。

「ま、まさか……」

「そう。本物の、人の死体だ」

もう一度、そのぶら下がった死体に目を向ける。

どれにも、何かが貫通した跡があった。首を吊られているせいで目玉と舌が飛び出している。いくつかは目玉が取れて無くなっていた。

頭が吹き飛ばされている物もあった。脳みそのようにも見えるが、どちらかというところと真つ二つにしたカブトムシの幼虫から液体が流れているようなのを連想させる。

おじさんは僕の横を通り過ぎて、さっきのベレッタM92を手にし、ポケットから取り出したマガジンを装填すると、

「こつという風にするんだよ」

とニコツと笑い、ためらいなく引き金を、死体に向けて引いた。バアン、というありきたりな銃声の次に、ベチャツ、という蒸れたトマトが潰れたような不快な音がした。

こここの奴ら、みんなイカれてやがる……！！

「さ、ジョブス君」

手本を見せたおじさんは、そつと僕に拳銃を差し出した。

受け取る手が震えた。

手に取った拳銃は、最初に手にした時のように弾倉は空っぽではない。もちろんだが、安全装置なんかハナから外してある。

たった一発で人ひとりの命をどうにか出来る代物を手にしてしまった。

その恐怖は、この前の訓練でブギーマンに殴られた時や、おじさんの殺気に襲われた時とは違った。

身の丈を超えた物を手にしてしまった時の、どうすればいいのか

分からないという恐怖だった。

「さあ」

おじさんが、手を死体に向けて伸ばす。

「撃つことで、その強大な物を克服するんだ」

今の僕を背中から脅かしたなら、きっと僕は腰が砕けて座り込んでしまっただろう。それほどまでに限界が近かった。

でも、それでも僕のプライドは折れない。続ける、続けろと命令してきて、拳銃を握らされる。

本当は人殺しなんかやりたくないんじゃないか？ 僕は。

そんな心の中の葛藤は、いつだってプライドが勝ってしまうのさ。

「わああああアアアッ！！」

目を瞑り、当てずっぽうに引き金を引いた。

ガキーン、という固い物が固い物を弾く音を聞いて、僕は尻餅をついて倒れた。拳銃の威力に押されたのではなく、撃てたことで気が抜けたせいだろうね。

顔を上げて死体たちを確認しても、当たったかどうか分からないほど損壊している。

「今のって……」

「ああ、うん。外したけど、これで吹っ切れたんじゃない？」

また笑顔を浮かべるおじさんは、部屋の隅っこを指差した。そこに先ほど撃った弾丸が転がっていた。

言われた通り、確かに僕の心は吹っ切れていた。撃つことへの罪

悪感撃つことの快感に変わっていた。普通に生きていたんじゃない、まず味わえないだろう。

「もう一発、行く？」

そのおじさんの科白に、僕は黙って頷いた。

「ん、じゃあ、次は死体を狙ってみようか」

言われて、僕は死体に銃口を向けた。

死体は幾度となく撃たれてきたんだろう。肉は腐り、銃創などなく、今まで当たった弾は全て死体を撃ち抜いていた。

多分、僕の撃つ弾は、またあの死体に風穴を増やすはずだ。

だけど、撃とうと引き金を引くと、頭の中に妙な声流れこんでくる。

男か女か。いや、老若男女すらも分からない声。それが、性別も年齢も知れないほどグシャグシャになっている死体から聞こえたような気がした。

“撃つな”、と。

駄目だ。指が震えて、狙いが定まらない。カチカチと、指が拳銃を叩くだけで、そこから先に進めない。

またさっきの恐怖が湧き上がってきた。

「ジョブス君。そういう時は、思い切りが大切なんだ」

おじさんのゴツイ指が僕の指に重ねられた。

そして、グイッと力強く引き金は引かれた。

グシャッ、という、おじさんが撃ったときのような不快な音が聞

こえた。

「ひいつ……」

血が飛び散る様を見て、特になんとも思わなかった。むしろ、ゲームみたいだと現実味を感じていない。

撃つことの快樂もまた訪れた。

「はは、は……」

ポロツと拳銃を、手を滑らせて落としてしまった。ガチャ、と重い音がするだけでそれ以上のことは起こらなかった。

これを何度繰り返されるんだろう。きつと、慣れるまでやらされるんだろうな。

死を体全体に染み渡らせた僕は、もう死体を撃つことに躊躇はしなかった。

もう一度拳銃を手にとって、引き金を引く。いとも容易く。

また不快な音が聞こえた。肩に当たったらしく、腐った腕がぼとりと床に落ちた。そこから黒ずんだ血が、粘液のような粘りっこさで溢れ出す。その黒ずんだ血から、虫らしい生き物が何匹か飛び出した。

「ま、死体を撃つぐらいは簡単にクリアしてくれたね」

僕は気が狂ったように、黙って撃ち続ける。

そこで肩を叩かれた。

「そろそろ帰る時間じゃないか？」

「えっ？」

我に帰った僕は、おじさんの着けていた腕時計で時間を確認した。六時……。確かに僕の外出時間の限界だ。拳銃を台に置く。

「どうだった？」

公園まで戻ってくると、おじさんに感想を聞かれた。どうだった、と問われても、なんとも言えない。ただ、

「本当に、僕は殺し屋になれるのか？」

それだけが聞きたかった。

ふざけたような真面目な回答に、おじさんは苦笑して、

「そうかい」

と笑顔を浮かべるのだった。

そして手を振っておじさんとは別れた。

家に帰ると、僕の顔とナリを見て、両親から「いじめられたの？」

とか「事故でも起こしたのか？」と詰め寄られた。

それを振り切って、僕は自室へと逃げ込む。

これは僕だけの秘密なのだ。誰にも話さない。

正直に言つと、めちゃくちゃ辛かった。

でも、ここで終わるなんて、僕のプライドは許してくれそうもない。

ブギーマンの一言が、それだけが一流のプライドを傷つけたから

だ。

“根性が無えなあ”

ぎりっ、と歯をこすらせた。

怒りがふつつと込み上げて、冷静さが一度消えた。

あいつをギャフンと言わせるまでは絶対に諦めるもんか。

ジョブス・マンソンは、この時生まれて初めて、本物の敵対心を抱いた。

あとは行動に移すかどうかだ（後書き）

「別に死体を撃つぐらい、どつってこともなくね？」

「体がボロボロで、助けを求めている女の人に銃口を向ける時、お前はどつという気持ちになる？」

「興奮するね」

「……」

狩りの本能か、殺人の快楽か（前書き）

犯罪っていうのは、理性を失った人間が行うことだ

その理性を失うには、二つの種類がある

一つは失うほどに追い込まれるか、それともともと無かったか

狩りの本能か、殺人の快楽か

次の日の学校のことだ。

登校中、またいじめっ子なんていう低俗な物に成り下がった連中が、僕を馬鹿にし始める。

「よお、ガリ勉野郎」

僕の体中のキズに目もくれず、いじめっ子の一人が調子づいて話しかけてきた。不愉快極まりなく、今すぐにも首のリンパ腺を掻き切ってやるうかという気分になるが、シカトをきめこむ。

その間も奴らは僕に汚くて低俗な罵詈雑言を投げかけるが、それさえも無視する。

「無視してんじゃねえよ」

ヘラヘラと笑いながら、いじめっ子が僕の鳩尾に拳を入れた。

だが、いつものように僕は呻かない。

変わったんだ。ブギーマンに何度も殴られ続けた僕にとって、いじめっ子の一撃は赤ん坊に殴られたのとなんら変わらない。痛みはあるが、それが呻くほどの物でもないのだ。

昨日までとは違う僕の変貌ぶりにいじめっ子が一步後ずさったところ、精一杯の嫌みをくれてやる。

「効かねえよ、サノバビッチ糞野郎」

そう強がって見せるが、顔は怯えだけが見えていた。

いじめっ子の顔がみるみるうちに赤くなっていく。怒っているんだろう。生きてきた中でも五本の指に入る爆笑イベントだ。

それでも僕は笑わない。

「いいタッチコミュニケーションだったよ。腹の痒みが取れた」
「やせ我慢すんじゃねえ!!!」

今度は肩に拳がきた。ちょうど、肩の中でも一番痛いところに当たった。

いじめっ子も感触で分かったらしく笑みを浮かべるが、

「おお、痛い痛い」

と、僕は肩をすくめて笑う。

なんて滑稽なんだろうか。なんて無様なんだろうか。

僕を取り巻くゴミ共は、たった一人のガリ勉すらも泣かせることが出来ないんだ。

他のいじめっ子も加勢しだす。

「ガリ勉が調子乗ってんじゃねえぞ!!!」
「死ね!!!」

背中や肩、腹に顔。

どこまでも容赦なく殴り、蹴ってくる。
それでも、

「一人じゃガリ勉にすら劣る奴らが、束になっても赤ん坊すら泣かせねえぞ?」

強がる。

更に威力は増していく。

痛い痛い痛い。涙が出そうになるが、それでも我慢する。この涙

は後に残すんだ。

学校についてからが、本番だ。

「ざけんじゃねえ!!」

きつと、昔の僕なら怯えていただろう。

いじめられている、なんてことを知られること。

だが今は違う。

それを逆手に取るんだ。

教室の真ん中、朝のホームルームで暴露してやる。

ボロボロの雑巾のように汚くなった僕は、泣きそうな顔をして言うんだ。

“僕は、いじめられています。”

いったいコイツらはどんな顔をするだろうか。

学年トップで、成績優秀な僕をいじめる奴。

しかもソイツらは欠点を取りまくる学校の目の上のたんこぶときた。

そして我が通う学校は進学校でいてプライド命だ。

確証が無かったって、間違いなく退学だね。

考えれば考えるほど、笑いは止まらなくなる。

「おい、気持ち悪いな。笑ってやがる」

抑えようとも笑いが出てしまっらしい。

いじめっ子たちは内輪話をコソコソとしたあと、逃げるように僕から離れた。

だけど、もう遅いんだよ。

それは先生の一喝で止められた。

一息に空気を吸い込み、

「僕は、いじめられています」

言った。

教室中がざわつき始めるが、それも先生の一喝で治まる。

そして僕は、いじめっ子連中の名前を淡々と上げていった。

その間にいじめっ子たちが「違う!」「やってない!」「なんて騒ぐが、またこれも先生の一喝、というよりも怒声で治まった。

「以上が、僕をいじめていた連中です」

教室が静まり返った。

勝った。

ファンファーレが頭の中で鳴り響いている。祝福してくれているようだ。

「本当ですか?」

先生が強い口調でいじめっ子たちに問うた。

「本当に違う!」

「デタラメだ!」

「嘘言っつてんじゃないやねえよ!」

いじめっ子たちの絶叫が響く。

ああ、これほど嬉しい日もなかなか無いな。

僕は立ち上がり、顔のアザや腕のキズを見せる。

「これは、登校中に彼らにつけられた物です」

またざわついた。

その中でポツポツと「私も見た」だとか「やっぱ不良だね」だとか僕に賛同してくれる声上がる。

どんどん彼らの立場が無くなっていく。泣きそうで、恨めしく見つめてくる彼らを見て、僕は心の中で大笑いした。

(いい気味だよ。そのまま路頭に迷え。全てに負け続ける。悪党は正義にはかなわないんだ!!)

歡喜の絶頂に立っていると、先生が大きいため息をついた。

「職員会議でこの件を話させてもらいます」

それだけを言って、点呼を始めた。

……。

クラスの会話に耳を傾けると、僕がいじめられている事を知っている人間が何人かいたらしい。

助けてくれなかったことに腹立たしさはあるが、仕方ないと思ったださ。さすがにあんな気違い野郎共と関わろうとする奴なんか、そうそういないね。

席に座ったまま教科書を眺めていると、いきなり胸ぐらを掴まれた。

相手？ そんなの分かって当然じゃないか。

「よくも言いやがったな」

いじめっ子たちだ。
公おまぢけに晒されたことで吹っ切れたのか知らないが、白昼堂々と教室で絡んできた。

「気が済むまで殴るかい？ やつたら君の親や警察、果ては教育委員会にまで言い、ここら一帯の学校に君らが『いじめ』なんてことをやったことを言いふらすよ？」
「うぐっ……」

さすがにコイツらもそこまでバカじゃないだろう。
退学が見えているのに、わざわざ編入するかもしれない学校を潰されたんじゃないあ、お先真っ暗だ。
胸ぐらは解放されて、僕は席に座り直した。

「謝ろうなんて考えるなよ？ もう何をされても決意は揺らがない。何が何でもお前らを地獄に叩き落としてやる」

死刑宣告を下すのは、とても清々しかった。

……。

カリキュラムも全て終了し、下校前のホームルームが来た。
苦い顔をした先生が、教壇の前に立つ。
嫌な予感がした。

「ええ、朝の、ジョブス君がいじめを受けていたことへの、彼らの処罰ですが……」

口に物でも含んでいるのか、と怒鳴りたくなるような黙り込みのあと、

「彼らの処罰は、保留となりました」

「は？」

オイ待て、どういうことだ。
なるほど、そういうことか。

つまり、進学校であり、名門でもあるこの学校は、そりゃあプライドだってある。

それで、いじめなんて発覚しようものなら、築き上げてきた風格や品格が損なわれる。

確実な確証と、その品格を落とさない手口を見つけないと処罰は与えられない。

まだ、足りないということだ。

ぬかった……！！

僕の生傷程度じゃあ確証にすらならないってことか。

なら、いじめられている写真を持ってくるか？ そんな簡単に手に入るわけがないだろ。

なら、もう手段は選ばない。

(奴らを、殺す！！)

殺し屋になって、奴らを一人残らずぶち殺す口実が、ここでようやく固まった。

後には引かない。

今まで生きてきたことを後悔させてやる。

エリートをコケにした罪は、軽くはないぞ。

狩りの本能か、殺人の快楽か（後書き）

「こんな簡単に決めちゃっていいのかね」

「学校側からしたら、学校の外に問題を出される前に早期解決したかったんだろ」

「そのせいで、いじめっ子連中はジヨブスの心に火をつけちゃったけどね」

「だな。あとは、殺し屋として足りる存在になるか、だが……」

それは些細な引き金に過ぎない(前書き)

拳銃っていうのは、とても扱いやすい殺人道具だ。

ただ、引き金を引くだけでいい。

あとは手に人肉の感触も残さず、罪悪感にも苛まれず、全てが終わっている。

それは些細な引き金に過ぎない

心の底から憤怒しながら、僕は家に帰った。

殺してやる、殺してやる、ぶつぶつと繰り返す。

またボロボロになった僕を母親が心配するが、腕で八工を叩くように払いのけて、そそくさと自室へと入る。

サツサと制服を脱ぎ捨て、服に着替えた。

まだ殺してやるを止めない。

またどこかへ向かう僕を母親が必死に止めたが、押し切って外出した。

「必ずぶつ殺してやる」

……。

「……やあ」

公園に着くと、おじさんが待っていた。手を振ってくれている。僕も振り返す。

今の僕は、殺し屋になることが人生の目標になってきていた。だから勉強なんて昨日と今日はまるでやっていない。

昨日と同じように、また謎の施設へと案内される。

「さて、と。順番では、次はナイフの訓練だ」

「ナイフ？」

「そうさ。これをマスターすれば、近接じゃあ怖い物無しだね」

ナイフとさえいえば、アクションゲームなんかでもよく出てくる短剣のことだ。戦い方は異なるが、どれにも首を切るといって一撃必殺の攻撃がある。

ああいう即死系よりも、僕はさんざんいたぶった上で殺してやりたいのだが。

「じゃ、いつもの訓練所に」

そう言われ、ブギーマンに殴られ続けた訓練所へと足を進めた。着くと、僕が昨日吐き出した血反吐なんか綺麗に拭き取られていて、そこでブギーマンに殴られたという事実は視覚から消えていた。

トラウマになってるのかな、と思ったが、自分の正常なところを見て、そんなことはないのが分かった。

部屋の中心に、一人の少年がいた。

「やあジョブス。久しぶりだね」

「ハリー！？」

そう。あの殺人ハリーだ。

顔は三ヶ月前に見た時と全く変わっておらず、女の子のようにも見える中性的な顔立ちと、中性的な声をしていた。

ハリーは右手にナイフを握っていた。

「次の訓練は、プロのナイフ使いであるハリーと、実戦だ」

「じ、実戦？」

いくらなんでも早すぎる気がした。

僕は生まれてこの方、包丁すらも持ったことがない。武器を扱う経験が無いのだ。

それなのに、いきなりプロと実戦をやれ、だと？

「死ぬぞ……これ……」

「大丈夫さ、ジヨブス」

ハリーはナイフを両手で持ち、胸の前に持つてくる。

「手加減してやるから、さ」

完全に馬鹿にした顔だった。

ハリー本人からしたら友好的な微笑みだったのかもしれない。が、僕というプライドの高い奴に「手加減してやる」なんて言葉は、逆鱗に触れるには十分だった。

僕は頭に血が上り、カアーツ、と顔が熱くなる。頬が真っ赤に染まっていた。

おじさんがどこからともなく取り出したナイフを手に入れ、構える。

「そのニヤついた顔を、真っ青にしてやる」

「出来るかな？」

僕は何の考えもなしに突っ込んだ。

ナイフの切っ先をハリーの心臓めがけて刺す。

だが、それはハリーのナイフに弾かれた。

「ダメだよ、もう」

直後に、僕の首筋にはハリーのナイフがあてられ、開いた傷口から血が滴っていた。

強すぎる。

まるで歯が立たないのだ。

たったこれだけの一連の動作で理解するには十分すぎた。コイツはプロだ。紛れもなく。

その気になれば僕なんか一秒とかからず殺せるだろう。

「続ける？」

ハリーは、ナイフについた僕の血を舐めとりながら聞いた。続けるか、どうか。

「ああ、まだだ」

続けるに決まってるだろう。

「なら良かった。これで諦められたんじゃあ、つまんないもんね」

微笑みを浮かべるハリーに、僕は苛立ちを超えて、ライバル意識が芽生え始めていた。

追い越すつもりで戦う。

一太刀でも加えるのを目標になんとか頑張ってみせる。

もう一度、僕はハリーにナイフを突き立てた。

何時間経っただろう。

腕が鋼鉄で作ったかのように頑固くなり、動かない。

はあはあ、と肩で息をしている僕に対して、ハリーは全く息を乱していないかった。

絶望的な差だ。差、なのだが、

少しづつ、ハリーの動きが見えてきた。

たった一日でプロのナイフを弾き返せるほどに成長していたのだが、そこから先に進めない。

「そろそろ疲れてきたし、終わりにしよっか？」

ハリーが肩をすくめて提案する。
ダメだ。

「まだまだ……」

あと少しで掴めそうなのに、ここで止めたら、また逆戻りのような気がしたのだ。

往生際の悪い僕の言葉に、ハリーは軽く笑った。
お互いにナイフを構える。

「はあっ！」

真っ直ぐに、ハリーの心臓へとナイフを突き立てる。

すぐにハリーのナイフが弾き返そうと襲ってくるが、それを見切り、逆に僕が弾き返した。

のけぞるハリーの間をつく。

「もらった!!」

心臓まで、あと数センチ、というところでハリーのナイフがいきなり現れ、僕のナイフを弾いた。

しかし、それでもハリーの胸の横を掠め、服を裂いた。

「きゃっ！！」

ハリーが、女の子のような悲鳴をあげた。
ニューハーフかよ、と思いつながら、服の裂けたところを見ようとすると、

「わー！ ダメ、ダメだよ！ 見ないで！！」

となぜかハリーが胸を腕で隠してしまう。

「なんでだよ」

僕は更に不思議に思い、ハリーの腕を掴んだ。
グイッと引く張る。

「ひゃうう……」

男のクセに情けない声を出して、ハリーはボロボロと泣き出した。
そこまでして隠したい物はなんだろうか。僕は裂け目を見た。

なぜかハリーの胸には、女の子みたいな膨らみのある乳房が見えていた。

わなわなと後ろに一步退いてしまう。

おい、これって、まさか。

「ハリー。お前って、ニューハーフだったのか？」

「違うよ！ れっきとした女の子だよ！」

いまいち信じられないような目で見てみると、ハリーは服を更に裂いた。

胸が、乳輪から何まで全てさらけ出されている。

「確かに小さいけどね、女の子だよ！ ほら、ほら！」

膨らみのある胸をこれでもかと僕に見せつけ、近寄ってくる。

鼻先を、膨らんだ胸の突起部分である乳首がかすめた辺りで、ハリーが慌てて胸を隠し、僕から離れた。

「確かにさ、男の子みたいな名前だし、顔だけど、女の子だよ……」

ようやく我に帰ったらしい。

男の子みたいな名前、と言うがハリーは男の名前だ。あと、その中性的な顔立ちが女の子のそれに見えなくもない。美少女とも例えられなくもなさそうだ。

まるで発情したかのようなハリーの行動に、僕は口を開けたまま固まっていた。

「あ、ジョブス。これ、内緒にしてね？」

「うん……」

内緒もなにも、信用してくれる気がしない。

ハリーは男ということと学校には登録されてるハズだ。しかし、目の前のハリーは女だった。

ああ、つまり、どういうことだ。

「なあ、ハリー」

「ん？」

「お前、学校では男として登録してるだろ。どうして嘘なんかついた？」

「男だといろいろ都合だからかな。この顔と胸だし、男と間違われるからね」

それだけの理由で男と偽るなんて、殺し屋というのは案外つらい世界なのかもしれない。

ハリーが「あ、そうそう」と思い出したような口振りで話し出した。

「女の子に何回か付き合おうとか言われてさ。大変だったんだよ。そのうちの一人が無理やり服を脱がしてきてね。女だって知った途端に泣きながら帰っていったよ」

「は、はは」

その女もつくづく不幸だな。

愛した相手が女で、しかも無理やり襲ってしまった。恥ずかしさで死にたくなるだろう。

いつの間にか友達同士の雑談になってきているのを、おじさんの拍手が止めた。

「そろそろ、次の訓練をするかい？」

「はい」

僕はナイフをおじさんに返し、ハリーに別れを告げて次の訓練所へと向かった。

それは些細な引き金に過ぎない(後書き)

「中性的な見た目って、いいよね」

「いきなり何を言い出すんだ？ 気持ち悪いぞ」

「だって、それは可愛いし格好良くも見えるわけだろ？」

「確かにそうだな」

「お得じゃん」

「いや、お得ってなんだよ……」

「シヨタとロリを同時に楽しむ」

「捕まれ未来の犯罪者」

射出された銃弾は心臓をぶち抜く

僕は今更になって、ハリーの裸にドキドキし始めていた。

今まで一度だって、ああいう経験はない。女の子と触れ合う機会なんかはまず無かったからだ。

勉強を教えて、とも言われはしない。ほとんどが僕よりいくつも下にいるイケメン野郎に教わっているからだ。キヤーキヤー騒ぐビツチ共の声は、聞いてて不愉快だった。

だからと言って、教わりに来る奴がいなわけじゃない。不良や、根暗が勉強を教えてくれと来たりする。そのたびに教えてやった。真面目にね。

試験が終わり、僕が教えた不良はクラスの中でもワースト10に入る成績になっていた。もともと成績の良かった根暗君も、僕の下の二位だ。他にも僕が勉強を教えた人間ばかりが上位を占めていた。イケメンの方だが、もちろんそんな奴らにかなうわけもなく、女子たちは高得点を取った不良たちに『カンニング』などという言いがかりをつけていた。

そんなのが有り得ないことを、僕自身が分かっている。だから抗議したんだ。そしたら、なんて言ったと思う？

「馬鹿」

だとさ。

馬鹿？ 僕が馬鹿なら、お前たちはなんだ？ ミジンコか？ ゴ

ミか？ クズが。

他にもむずがゆくなるような低年齢レベルの言葉を次々と投げかけてきてくれたね。実に面白かった。

女子に教えていたイケメンも、その女子をほったらかして僕に勉

強を教わりにきた。無理を言うもんだから、嫌々付き合ってた。もうクラスの男子全員が、一流の高校に上げられるレベルになった時、学級会が開かれた。

そして、一人の女子が起立して、言ったんだ。

「ジョブスはカンニングをしています」

馬鹿な話だろ？

男子が揃って優秀になって、女子は馬鹿ばかりになった。

その腹いせが、カンニングなどというでっち上げだ。

実に楽しい。

「本当？」

先生が疑った目で見つめてくる。もちろん、僕がカンニングをしたことじゃなく、女子の言うことが本当かどうかについてだ。

僕はさっさと否定した。

「違います。僕はしていません」

女子の、黒板を引っ掻くような金きり声が次々と聞こえてくる。

「嘘つき！」

「犯罪者！」

「ブサイク！」

「早く私たちに謝れ！！」

謝れ？

「謝れって、どうしてだ？ たとえ僕がカンニングしていたとして

も、君たちに謝る義理はないだろ？ それとも何か？ イケメンたちを僕に取られたことが悔しいのか？」

挑発的な僕の言葉に、更に女子たちはヒートアップする。

「……チツ、うるさいなあ。先生、座っていいですか？ これで分かったでしょ？ このビッチ共は、自分が勉強出来ないことを棚にあげて、僕に嫉妬しているんです」

「え、ええ。座ってください」

ここで着席を促されたことで、先生は僕を信用してくれていることは明白だった。

女子はまだ騒いでいる。

ここで、クラスのイケメンや不良が女子に対抗し始めた。

「お前ら！ ジョブスはな、ちゃんと勉強を覚えてくれたんだよ！ カンニングなんかする奴じゃねえ！！」

「そうだそうだ！ だいたい、ジョブスはどんな問題に当てられたって、時間もかからずに完璧に解いてただろうが！！」

「ここまで教え方が上手いのはジョブスの才能だよ！ だから俺たちはここまで勉強できるようになったんだ！ そんな奴がカンニングする必要ないだろ！？」

ものすごい優越感だった。

今や、クラスの半分が僕の味方だ。

しかも、その全てが疑いようのない正論だった。

「あんだ達がテスト問題を先に見てるんでしょ！？」

一人の女子がボロボロと涙を流しながら、震える声で言った。

すぐさま男子のほとんどから反論され、その女子は泣きながら机に突っ伏した。

完全な、大勝利だった。

「さあ、ここだよ」

おじさんが開いた扉の中は、チューブのたくさん付いた椅子がつつ、ポツンと置いてある部屋だった。

何に使うのかは、だいたい見当がついた。アニメか映画で見たことがある。電撃で拷問する機械だ。

「これで、君の心拍数を400まで上げるといふ、常人ならざる技を可能とさせる」

おじさんは手を滑らせるように、椅子に這わせた。

「たかが電撃程度で、本当にそんなことが出来るのか？」

「もちろん。ただし、君だけだがね。普通の人間ならば、心臓が止まっているレベルだ」

心臓が止まるレベル、という言葉にジヨブスは寒気を感じた。

心臓を止めかねないほどの電撃。それを、心臓を止めずに感じ続ける、ということだろうか。

「痛い……はずだ」

「うん、痛いね。心臓より先に脳の細胞が死滅するんじゃないかな？」

勉強が出来なくなりそうだな、といまいちピンと来ない考えを浮

かべる。

電気イス。拷問にも使われるものだ。人道や道徳を無視した代物。たった数秒だけでも死にそうになる激痛が襲う。それを、更に強くして、何秒間も浴び続けるのだ。

「ごめんね。うちにある麻醉打つても、あんま変わらないし。我慢してね」

おじさんが軽い調子で言った。

さつきまで、これから起こることをいくつも考えていたのに、なぜか座ることに恐怖はなかった。

椅子に尻を置いた瞬間に、鋼鉄のベルトが腹を、ガシャン、と固定した。

腕や足を指定の位置に動かすと、また固定される。

「覚悟はいいかな？」

おじさんが、少し離れたところにあるレバーを握っていた。僕はコクリと頷いた。

「じゃ、行くよ？」

そして、一気にレバーが引かれた。

ドッ、という音にならないような低い音が耳を駆け抜けて、すぐに聞こえなくなる。鼓膜でも破けたのだろうか。

激痛が、ひたすらにジヨブスを襲い始めた。

声すら出ない。

死ぬ、と思った時には、ジヨブスの視界は真っ暗になっていた。

射出された銃弾は心臓をぶち抜く（後書き）

「筆者は女子に恨みでもあるの？」

「単純にバカ騒ぎする女子が嫌いなだけだろ。大人しい女の子が好きって言うってなしな」

「大人しい子が好きって言う奴はな、たいてい自分が主導権を握りたい奴なんだよ」

「ほお。じゃあロリコンでシヨタコンである変態のお前はなんだ？」

「主導権を握りつつも、相手からも積極的に来てくれて、お互いに幸せになれー」

「とりあえず警察に通報しといた」

それとも脳をぶち抜くか

意識が戻った時には、錆のように見える赤茶色の天井が見えた。体を覆う軽い何かの感触は、薄いシーツだった。僕が寝ていたのはベッドらしい。

「あ、ああ……」

そうだ。

僕はあの電撃に耐えられなくて、それで気絶したんだった。想像を絶する痛みは僕の体が対処仕切れなかったんだろう。自分の声が聞こえたということは、鼓膜は破れていないのかもしれない。まあ、拷問する機械なのに鼓膜を破っちゃうやあ意味がないしね。

「う、頭が痛い……」

起き上がり、痛みで頭を抱える。

ぼやけた視界の中、扉が音も無く開くのが見えた。ジャパニーズホラー映画にも、こんなシーンがあった気がする。

たしか、白いワンピースを着た髪の長い女が、地面を這って――

「起きたみたいだね」

おじさんだった。

拍子抜けしたような、期待外れのような気持ちになるが、ここで化け物が出てくるのもおかしい話かもしれない。

殺し屋の集会所だから、もしかしたらアリなんじゃないかと思っただが、頭を振ってなんとか忘れさせた。

「元氣そうじゃないか」

ニコニコと笑顔を浮かべるおじさんは、両手に湯気の上がるカップを持っていた。中身はコーヒーらしい。

「ジョブス君は、甘いのと苦いの、どっちが好きかな？」

「苦い方で」

と言うと、おじさんは真っ黒なコーヒーを手渡してくれた。

別に手で触っても痛みを感じるほどの熱さはない。ついさっき入れたばかりの物ではないようだ。

もしかしておじさんは、僕が目覚めるのを待つつもりだったのか？

「はは、苦い方が。良かったよ。苦いのは嫌いだね」

嬉しそうなおじさんはコーヒーをすすった。

僕もコーヒーをチビチビと少しずつ飲む。

ラッパ飲みをして、ぷはあ、とおじさんがビールを飲んだ時のような景気の良いため息を吐く。

「やっぱり砂糖は二十個は入れないかね」

とんでもないことをさらっと言ってのけたおじさんに、僕はコーヒーを吹き出しそうになった。

砂糖二十個なんて、いくら甘い物好きでも飲まないぞ。中途半端に甘い物好きじゃなくて良かった。

舌に障る苦さを味わっていると、おじさんは近くにあったイスを引っ張ってきて、座った。

「さて、まあ一通りの訓練は試したわけだが」

先ほどのような笑顔もどこへやら、おじさんは神妙に聞いてきた。

「どうだった？ 続けられそうかな」

「はい」

「本当にそうかな？」

「本当にそうですよ」

「別に、『殺し屋組織のことを知った奴は生きて返さねえぜ！』みたいなことは言わないよ？」

「大丈夫です。僕はやれます」

「そうか、そうか」

また嬉しそうにおじさんは笑った。

僕が飲み干したカップをおじさんが手に取り、部屋から出て行った。

頭の後ろで手を組んで、またベッドへと倒れる。

「それにしても、最後の電撃、一瞬だけどーー」

言い表しにくい言葉のせいで詰まった。

「時間が止まったような感覚になったな。必死に心臓に意識を向けていたら、なんだか舞うホコリすら見えるぐらいに」

あれが、僕の特殊能力なんだろうか。

などと考え事を口に出していると、またおじさんが入室してきた。

「とりあえず、訓練は続けられることが決定したよ。あとは君次第だ」

他にもいろいろと褒め言葉を貰ったが覚えていない。
家に着いたらすぐに夢の中、だったからだ。

……。

ここからは進展するまで、簡単なあらすじを教えよう。

まず学校だ。

いじめっ子たちは生存に成功した。もちろん、執行猶予のような物だから僕に手出しは出来ないけどね。

だから僕は学校面にストレスはなく、快適な学園生活を送った。

次に殺し屋だ。

ブギーマンの拳にも耐えられるようになってきて、奴が疲れ果てるまで立っていられるようになった。

射撃訓練だが、0.8秒ほどの時間があれば、動かない物ならヘッドショットは確実になってきた。必死になって弾丸を撃っている、たまに弾丸がありえない軌道を描いて飛ぶことがあるが、気のせいだと思う。

ナイフだが、ハリーの服をスタスタにして、真っ裸に出来るほどに成長した。いつも、泣きながらナイフを振る様は小動物のような可愛さがあるね。遅く見える能力だが、あとちょっとというところで気絶してしまう。未完成だ。

今日の十二月。かれこれ三ヶ月が経つ頃だった。
とある事件が起こった。

……。

僕はナイフの実力を認められ、常用の許可を得た。もちろん学校にも持っていつている。

さすがに見せびらかすようなことはしない。手の内がバレた時は死ぬ時だ、とかなんとかおじさんに説教されたのもあるけどね。

「はい。では、ここの連立方程式を」

女の先生がグラマラスな胸を揺らしながら、チョークで書かれた数字を指差した。

と、その時だった。

『校内に不審者が侵入。校内に不審……が……う……』

流れた校内放送は、途中でノイズが走ったため全て聞き取れなかった。

慌てる生徒たちより早く、先生が扉の鍵を閉める。

「早く！ 早く扉を閉めて！！」

先生の絶叫にも似た声に、もう一つの扉付近にいた女生徒が急いで扉を閉めようと近寄る。

が、

「ひぐっ」

扉が開き、出てきた何者かに羽交い締めにされた。

全員が硬直した。

その羽交い締めに行っている奴は、全身を防弾着に身を包み、頭は布を被って目と口を開けている異様な格好だった。

多分、その場の全員が思っただろう。

テロリストだ、と。

「お前ら、殺されなくなかったら大人しく一カ所に固まれ」

男の声だった。

防弾着に身を包んだ男が女生徒の両腕を掴み、手に持っていた銃口を頭に突きつけた。

次にぞろぞろと同じ格好をした人間が四人入ってきた。

揃って、五人か。

「お前ら、あいつらを縛れ」

女生徒を捕まえている男はリーダーらしくて、他の四人に指示を出した。

四人ともがアサルトライフルを持ち、構えながら近寄ってきた。

いじめっ子たちが抵抗するかな、と思ったが黙って腕を縛られていた。

僕も、後ろに両腕を縛られる。

「これで全員か」

一カ所に固められた僕たちは、五人のテロリストと、捕まえられた女生徒を見上げる形になった。

なんなんだよ、コレ。

途端に、銃声が響いた。

隣のクラスからだ。悲鳴が聞こえる。

「へへ、あいつら、殺しは極力するなって言ったのによ。もう始めやがったぜ」

そういうリーダーの男も、うずうずしているような口調だった。殺される。

奴らからは微力だが殺気を感じる。殺すつもりはあるようだ。

だが僕が訓練を行っていた殺し屋組織の連中に比べて、そこまで精神にダメージは無い。

多分、このクラスの中で一番冷静なんじゃないだろうか。僕は。

「チツ、警察か」

外からパトカーのサイレンが聞こえてきた。

しかし、これじゃあ攻めることも出来やしないだろう。

「しかし、こちらには人質がいる」

リーダーの男は、覆面からも分かる笑顔を浮かべた。おじさんとは違う、汚らしい笑顔だった。

さあ、どうするか。

両腕は後ろに縛られているが、すでにナイフを取り出している。ナイフで縛っているロープのような物を、ギリギリと切り、ちぎった。

「……」

それでも動けない。

人質がいて、銃を持っているのだ。まともにもやりあっても勝てる見込みがない。

「来るまで暇だから、な」

リーダーの男は女生徒の体を舐めるように見つめた。

「お前の体で遊ばせてもらおうか」

と言ったと思うと、無理やりに服をちぎりだしたのだ。色物のブラがさらけ出される。

「やめ、やめてっ!!」

女生徒が泣き叫ぶが、それでも止まらずに男はスカートを無理やり脱がせた。ブラのホックも千切られる。

また銃声が隣のクラスから響いた。

それにしても、その銃声はリズムがおかしい。

普通、遊んで殺すのなら、リズムカルに撃つはずだ。なのに、その銃声はてんでバラバラだ。

「……まるで、何かと戦っているかのように。」

男は、女生徒の無地の白いパンツに手をかける。

突如、ガラッ、とテロリストたちが入ってきた扉が開いた。

「!?!」

テロリスト共々、僕らはそちらを見る。そこには、ハリーがいた。

「ハリー！？」

ハリーは二丁の拳銃を持ち、そこから教室内の机に向かって飛んだ。

そして二丁の拳銃を、水平になぎ払うように振り、撃つ。

二つの弾丸は、見事な曲線を描いて二人のテロリストの肩に当たった。

「バレットカーブだと！？」

リーダーの男が後ろに後ずさりながら叫んだ。

だが、まだ女生徒はリーダーに捕まっていた。

テロリストたちは反撃に出るが、ハリーは身を守るために机を倒し、無傷だった。

まるで、映画のようだった。

「ジョブス、なにポーっとしてんのさ！」

ハリーが僕に向かって片方の拳銃を投げた。ベレッタM92だ。僕はそれをすでに解放されていた両手で受け取る。

「お、おい、ジョブス」

いじめっ子が、消え入りそうな声で僕を呼んだ。

それに振り返らず、僕は言う。

「ありえないと思うだろ？ 僕は殺し屋なんだぜ」

「こ、殺し屋！？」

クラスメート達がざわめきだす。

そりゃそうだろう。

ただのガリ勉の根暗でいじめられっ子が、なんとまさかの殺し屋だったのだ。

「さあ……」

ナイフの柄に入っていたマガジンを取り出し、リロードを手際よく行った。

最高にかっこいいだろ？

「パーティータイムだ」

それとも脳をぶち抜くか（後書き）

逆転劇

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1967z/>

殺し屋ジョブスはいじめられっ子

2011年12月14日23時53分発行